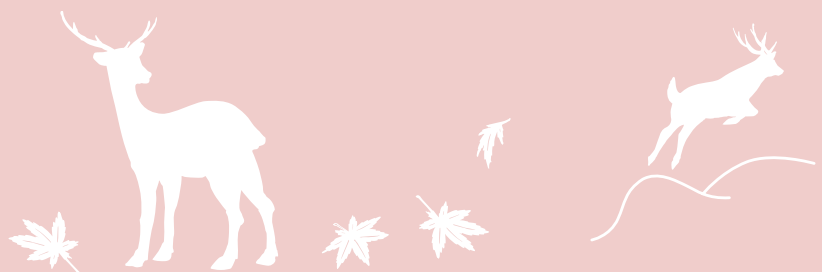




# 地理・地図資料

帝国書院

2010年度 2学期号



# バングラデシュ

2009年9月、国土の2/3が三角州上にあるといわれるバングラデシュ取材した。都市部の様子と農村の暮らしをレポートする。



①

写真はすべて2009年9月撮影／帝国書院



②



③



④



⑤



⑥

バングラデシュは、1971年にパキスタンより独立した比較的新しい国である。ガンジス川とブラマプトラ川の三角州に位置して、洪水のたびに新しい土が運ばれ堆積するため、肥沃な土地が広がっている。熱帯モンスーン気候に属しており、雨季と乾季が存在する。雨季には河が氾濫し、田畑に貯まった水を湖と見間違えてしまうこともあるほどである。バングラデシュでは、雨の日はのんびり過ごすことが多いのも特徴だ。

バングラデシュでは交通の手段として電車、バス、車、CNG車（天然ガス車）など様々あるが、その中「リキシャ」は欠かせない乗り物のひとつである。バングラデシュは「リキシャの本場」で、とても多数のリキシャがひしめいており、首都ダッカだけでも50万台ものリキシャが走っているといわれている。安くて小回りが利き、どのような小道にも入って行け、庶民の足として気軽に利用されている。リキシャの大きなメリットとして、ガソリンなどを使用しないため環境にもとてもよいことがある。しかし、リキシャは大通りでは最大の交通渋滞の原因となっている。そのため国土交通署からリキシャの進入が禁止されている道路も、最近増え続けている。政府は、環境対策として天然ガス（CNG）使用の乗り物を奨励している。首都のダッカではCNG車以外の乗り入れは法律で制限されているため、市内でも表紙写真のように空や空気も澄

んでいる。

バングラデシュは、発展途上国のひとつでもある。現在は年6%以上の経済成長率で発展しており、日本で繊維産業が隆盛した時代と同じような現象が現在のバングラデシュで起こっている。市街では、大型ショッピングモール、マンションなども増え続けていて、あちらこちらで建設ラッシュの様子をみることができる。成長にともない物価も上昇しており、毎日のように高くなってきているのが実感できるほどである。

バングラデシュのおもな工業製品は衣類、皮革製品、食品、飲料、タバコ、化学製品、金属加工品などである。その中でも、近年のバングラデシュの発展を支えているのは繊維産業である。衣料品を中心とした繊維産業は、多くが輸出品の中心でもあり、約6,500億円ある輸出の8割近くを占めている。まだまだ賃金が安く豊富な労働力を求めて、海外のバイヤーがバングラデシュの縫製産業に注目している。ヨーロッパ、アメリカの大手ZARAやH&MやGAPなどの製品も生産しており、ユニクロのファーストリテイリングもバングラデシュの貧困解決のために活用されているグラミン銀行と合弁会社を設立し参入した。他にも日本企業も多数参入している。これからアジアの中でも繊維産業の中心地として注目の国となるだろう。

## 取材レポート

### 帝国書院取材班

成田空港からシンガポールを経由し、バングラデシュ現地時間の23時55分にダッカ空港に到着した。到着してまず驚いたことは、深夜にもかかわらず道路を走る車は、みなクラクションを頻繁に鳴らしルール無用で走り抜けていくことだった。

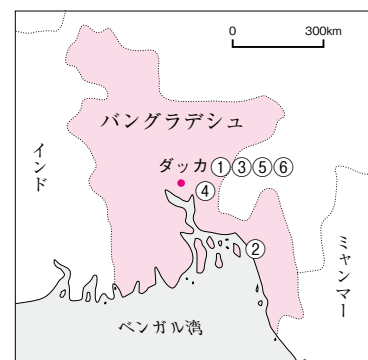
ダッカ市内では、近年のバングラデシュの様子を取材した。市内には、リキシャや三輪バイクが市民の足として走り回り、どこも多くの人であふれていた（写真①）。ダッカは成長が著しく、ショッピングセンターやマンションの建設ラッシュであった。中心部には近代的なショッピングセンターもできており、多くの人でにぎわっていた（写真③）。ここ

でも携帯電話やゲーム機を売る店が人気であった。

ダッカには、女性の働き口として縫製工場が多数進出していた。取材した工場はロシアやヨーロッパ向けの製品が主流だが、日本向けの製品をつくっている工場もあるとのことだった（写真⑤）。

取材に訪れた時期はイスラームのラマダーン（断食月）期間であり、夕方のモスク周辺はイフタル（夜の食事）用の食材を売る屋台がならび、香ばしい揚げ物の香りが漂っていた（写真⑥）。

第2の都市チッタゴンでは、船の解体業が多く、海岸に引き揚げられた多くの大型船が人力で解体されて



いた（写真②）。

郊外では米やジュートの栽培がさかんで、写真のように田植えと収穫が同時に行われている様子が見られた（写真④）。最大四期作を行うという。

成長著しいバングラデシュでは、圧倒される人々のパワーを感じることができ、印象的な取材となった。